

分自身を意識することになる。記憶があらゆる瞬間における自分の存在の同一性という感情を拡大する。かれはほんとうに一個の同一の人間となり、したがってすでに幸福あるいは不幸の感情をもつことができる。だからこれからはかれを一個の精神的な存在と考える必要がある」<sup>18)</sup> と。

ところでこの時期の子どもに周囲の大人が払わなければならない配慮としてはとくにどのようなことがあるのであろうか。ルソーは逆説的な言い方でそれは世間でおこなわれていることとはまさに反対のこと、すなわち子どもの理解力を超るようなことはあえてなにもなにも教えようとはせずそのかわり存分に体を鍛えてやることである断言する。「初期の教育は純粹に消極的でなければならない。それは美德や真理を教えることではなく、心を不徳から、精神を誤謬からまもってやることにある。あなたがたがなに一つしないで、なに一つさせないでいられるなら、あなたがたの生徒を、右手と左手を区別することも知らせずに、健康で頑丈な体にして十二歳まで導いていけるなら、あなたがたの授業の第一歩からかれの悟性の目は理性の光りを見るだろう。なんらの偏見ももたず、なんの習性ももたないかれは、あなたがたの授業の効果をさまたげるようなものをなに一つもたないだろう」<sup>19)</sup> とか「肉体を、器官を、感官を、力を訓練させるがいい。しかし、魂はできるだけ長いあいだなにもさせずにおくがいい。いろいろな考えを評価する判断力が生まれるまえのあらゆる考えを恐れなければならない。外部からの印象を押しとどめ、さえぎらなければならない。そして悪が生まれてくるのをふせごうとして、はやく善を育てようといそいではいけない。理性が光りをあたえなければ、善もけっして善とはならないからだ。あらゆるおくれは利益となると考えるがいい」<sup>20)</sup>、またさらにはこれをもうすこし敷衍するかたちで「わたしが引きはじめた図面どおりに、世間一般にみとめられている規則とまったく反対の規則にしたがっていくなら、あなたがたの生徒の心を遠いところにむけさせないで、たえず

かれを別の場所、別の風土、別の時代に、大地の果て、さらに天のかなたに、さまよわせるようなことはしないで、いつもかれ自身のうちにとどめ、直接かれの身にふれるものに心をむけさせるように努力するなら、あなたがたはやがて、かれが知覚、記憶、さらに推論の能力さえもそなえているのをみいだすことになる。それが自然の秩序なのだ。感覚する存在が行動する存在になるにつれて、かれはその力に相応した判断力を獲得する。そして自己保存に必要な力をこえた力とともに はじめて、その余分の力を他の用途にもちいさせるために役立つ思索能力がかれのうちに発達してくるのだ。だからあなたがたの生徒の知性を養おうとするなら、その知性が支配する力を養うがいい。たえずかれの体を鍛えさせるがいい。かれを強壯頑健にして、賢明で理性的な人間にするがいい。労働させ、行動させ、走りまわらせ、叫ばせ、いつも運動状態にあるようにさせるがいい。力においては大人にするがいい。そうすればやがて理性においても大人になるだろう」<sup>21)</sup> などとも述べている。理性が発達してからでないといふ理解できないような事柄についてはやくから教えこもうなどとするかわりにまず体を鍛えること、そして体を動かすための感覚を訓練することがなによりも大切だということ、理性はそのような感覚の発達の基礎のうえにはじめて花を開かせることができるというのである。ルソーはまた肉体、感覚、理性と当時行われていた教育のやり方との関係についてはつぎのような言い方をしている。「人間が行う最初の自然の動きは、……周囲にあるすべてのものと自分をくらべてみること、かれがみとめる一つ一つのものについて自分に関係のありそうなあらゆる感覚的な性質をためてみることだから、かれが最初に研究することは自己保存に関連した一種の実験物理学なのだ。ところが、人間はこの世における自分の地位を知るまえに、その研究から遠ざけられ、理論的な研究をさせられる。繊細で柔軟な器官を、それがはたらきかけるべき物体に適合させることができるとき、まだ純

18) Ibid., p. 301

19) Ibid., pp. 323-324

20) Ibid., p. 324

21) Ibid., p. 359